

討論



司会・神谷 どうもありがとうございました。中馬のことについての信州馬と三河馬の話、新城ルートで矢作川ルートがあるという話、川の分一番所であっても陸路からも税をとっているという話、秋葉信仰においては秋葉信仰からの広がりとともに石工などで三河とか経済的にものを支えているという、三河のほうでもそういう背景があるというお話をさせていただいたと思います。それでは、すぐにパネルディスカッションに移りたいと思います。大塚先生、多和田先生、前のほうによろしく願います。一応シンポジウムですので最初にお三方の先生から他の先生方に対してコメントしていただいて、それぞれ応答していただき、残り20分ぐらいで参加者の皆さんからご質問していただき、パネリストの先生方にお答えいただくということで進めさせていただきたいと思います。それではまず多和田先生のほうからお二方についてコメントがあればお願い致します。

多和田 大塚先生の御報告の中で、秋葉街道の塩の道の話が三大塩の道の一つといわれているということについて、遠江の方にこれに関する史料があるのかどうか、信州にどのくらいの量の塩がどのように入ってきたかについて、どこまで追えるのかが気になります。私の報告だと飯田の城下町に三河方面から入ってきたものが多いので、遠山谷はどうかということです。秋葉街道は飯田にも最終的にはつながりますが、遠山谷をずっと北に抜けて大鹿村に抜ける道があるので、塩の行方がどうなるかを知りたいわけです。堀江先生の御報告については、興味深い史料を多く紹介していただきましたが、文化、文政期に信州中馬と三州馬が抗争するという有名な話について、国単位で分かれるというところをどこまで重視すべきなのか。信州の内部も実際には局所的な単位、村単位などで中馬組織は成り立っているのではないのでしょうか。私の示した近世初期の史料だと、信州馬、三州馬という国単位で明確に分かれているわけではありません。もちろん明和の裁許というものがあり、それをきっかけにして信州中馬というくりができたことの意義も大きいとは思いますが、その重みをどのように評価すべきでしょうか。私は信州の中馬である前に、たとえば平谷の馬であるとか浪合の馬であるとか、津具の馬であるとかというのがまずあって、争論を有利に進めるために自分たちは信州の中馬なんだという、そういう序列なのかとイメージしていますので、そこの折り合いをどう考えるのかを知りたいと思った次第です。

司会・神谷 どうもありがとうございました。大塚先生のほうから、多和田先生からのご質問で、秋葉街道と塩についてのご返事と、多和田先生と堀江さんに対するコメントをお願いします。

大塚 飯田の場合には、塩は三河からばかり入ってきているということですね。商品としての塩は各地から入ってきているかもしれないが、確認できるのは三河からということですね。遠江のほうからはどうかということですが、今回は分析的に塩の史料を見ているわけではないので、大変申し訳ないですが、ルートとしては先ほど話しに出た遠山郷とかのほうが多いのだらうと思います。秋葉のほうから行く場合には飯田のほうに行くのではなくて、もうちょっと東方面で北へ遡上して行くということのほうが多いのではないかと思いますね。遠州なり駿河で取れた塩というのは信州だけじゃなくて甲州だとかそっちのほうまで全部山を越えて入っていくというのは、ずいぶん前から言われていることで間違いないと思います。しかし、飯田に関しては史料をきちっと見ていないので申し訳ないですが、答えられないということです。さて、多和田さんの報告については非常に面白く聞かせていただきました。自給されないもの、自給できないものがどこから来ているのかという、当たり前のようなことをきちっと考えなきゃいけないのですが、個別のものの流れの中で考えて、しかも地域が何によって支えられているのかということでは、地域研究の中で伊那谷のほうの地域であれば実は三河というものを背景として持っていないと生存、存立が成り立たないという、そういう論点はやはり非常に新鮮に感じました。特に僕のほうから質問というのは、もうちょっと考えると出てくるのかも知れませんが、今のところはありません。大変面白い報告だと思いました。堀江さんのほうですが、これは一点、秋葉信仰の問題で意見があります。秋葉信仰というのは間違いなく三遠南信の関係といえますか、その中心点というか、そういうところにあるものだとは思いますが、それに留まらないですね。秋葉山へは愛知県の尾張部のほうからもたくさん来るし、瀬戸の窯業地帯の人は火の神ですからこぞって行きます。駿河の国も当然で、駿河のほうからもどんどん入って行きます。つまり、秋葉信仰はもっと広がりがあるわけで、その中で三遠南信というつながりでこの信仰を捉える場合、もっと広いところに秋葉というものを中心とした地域的な結びつきがあると思うのです。そうした中で特に三遠南信というものはどのような意味があるのかという形で捉えると、さらに意味深くなるのではないかなという、そんな気がしました。以上です。

司会・神谷 ありがとうございます。それでは堀江先生のほうから、多和田先生からのご質問で、国で分けるのがいいのかどうかということと、大塚さんからのご質問で、もう少し広い範囲の中における三遠南信の意味をお答えいただき、その後でお二人へのコメントとお願い致します。

堀江 そうですね。まず多和田さんのほうにつきましては飯田の町のいわゆる江戸初期の頃の、三州地域からきた馬糞が飯田のどの町に入るかということは非常に私も興味深く聞かせていただきました。また以前にも長野県史など読みながら面白い町だなというような印象を持っておりまして、今回の報告で飯田を出たものがどういふかたちで三河に入ってくるのかという問題、非常に興味をもって聞かせていただきました。先ほどご質問いただきました三河の馬なのか信州の馬なのかという、この問題ですが、確かに江戸の前期ではそういう意識というのは全くないんですね。それが明和年間に幕府が裁許するなかで示されます。言葉に御幣があるかもしれませんがど国郡制を意識した裁許というものでしょうか、これは支配とは違う、古代以来の国郡制をもとにしたものです。これは中馬の本来の権利というのは信州に与えられたものであるということが明確に示されるのです。そうした意識がいつから出てくるのかちょっとその辺りは私も非常に気になったところで今回ちょっとやり切れませんでしたので、お答えすることが出来ないという

のが現状です。ただ非常に興味のあるところで信州浪合とか拠点となるような幾つの中馬の村がありまして、三河の馬塚ぎとの争いが激しくなってくる。そのなかで三河とか信濃という一つの国郡制に基づいた判断で幕府が裁許するということが出てくるじゃないかなというふうに考えたいと思います。それから秋葉信仰の広がりの問題は確かに今大塚先生の言われましたように、火を使いますので瀬戸の窯業の間でも信仰があるかと思えます。また、近代になりますとかなり広範囲に広がってきます。特に鉄道が敷かれますと広範囲に秋葉信仰は広がっていくのかなというふうに思うんですけども。近世でも信濃・遠州・三河だけに限らず美濃においても東濃地域では秋葉山常夜灯があります。尾張、美濃、駿河なども含め広範囲でもっと見てみないといけないと思います。大塚先生の報告で興味を持ったのは、かつて三河・遠江・信濃は家康の五ヶ国領有に含まれ、家康の同じ支配下にあった地域です。それ以前には今川氏が駿河から遠江、さらに三河へと、東から西に支配を広げて三河・遠江・駿河を支配しました。この二者によってこの地域はかなりそのなかで紐帯、結びつきが、特に三河と遠江にはできたと思います。色んな繋がりができたんじゃないかなというふうに思います。特に曹洞宗につきましては浜松の普濟寺、寒巖派の話がありましたけども。三河のほうでも特に岡崎の曹洞宗万松寺は浜松の普濟寺の教線につながる寺院です。遠江と三河については今川氏と徳川家康の時代からの視点で考えるというのは、非常に面白い発想であって参考になるんじゃないかなというふうにお聞きしました。以上です。

司会・神谷 どうもありがとうございます。特に多和田先生や大塚先生に、堀江先生からコメントないでしょうか。よろしいでしょうか。それでは参加者の方からいとうとご質問があるかと思えますので挙手をお願いします。

質問者 A 三河の塩の輸送の方法ですけど西尾の吉良でも塩を作っているわけです。その塩と播州赤穂の塩がこの三河へ入ってきて、信州へ輸送されたということですけど、その道中が吉良から矢作川を遡って細川だとか挙母など、どこのあたりまで川で行って、伊勢神を通して根羽へ出て、根羽を通して行き、最終的には信州の塩尻まで行って、日本海から出てきた塩とそこで合流したと聞いたのですが、そのあたりのところがちょっとよく分からないのですけれど。もう一点は浜松城の石垣はどこの産のものが使われて、どのような輸送方法で浜松城へ積み上げられたということ、二つを知りたいわけです。以上です。

堀江 塩の問題をお答えしたいと思いますが。これは豊田市の足助町の小出家という家の史料を愛知県史が調査しまして、その中で足助へ入ってくる塩には二つ系統があることがわかりました。一つは矢作川を通して入ってくるルートです。これは今お話がありました吉良町の饗庭塩ですね。もう一つ、これは飯田街道を経て名古屋から入ってくる塩、これがあこ塩という赤穂の塩ですね。それが足助で一緒になりまして俵直しを行いまして足助ブランドの塩として信州へ送られてゆくかと思えます。矢作川水系の塩は産地から矢作川を遡上してきまして、矢作橋から上は川のルートを使って遡上することは岡崎の町の塩座の改めを受けなければなりません。岡崎の塩座は伝馬町と田町にあり、矢作川を遡上する塩については、塩座の間屋を通さなければならぬことになっていました。抜け荷がないように絶えず矢作橋の上から監視をしておりまして口銭を払った者のみ遡上できました。その塩座を通して入ってくるのは矢作川ルートでは平古まで舟で運び、平古から足助まで7里を馬附して運びます。飯田街道のほうは名古屋の町の城下町の異国屋又兵衛などの問屋が赤穂塩を運んでいます。足助の小出家も味噌を作っておりまして、その味噌に使われる塩は饗庭塩と赤穂塩の両方を使っています。信州まで塩がどのように運ばれたかは詳しいことはまだわかりませんが、足助までは以上のルートを辿っているといえます。

司会・神谷 浜松城の石についてはどなたかご存じではないでしょうか。

大塚 城のことはあまり研究したことないのでよく分からないのですが、報告の中で話をした伊豆石というのはかなり早くから切り出された石でした。この伊豆石は江戸方面にかなり行くのですが、浜松城でも使ったのではないのでしょうか。あまりきちんと答えられません。申し訳ありません。

司会・神谷 ありがとうございます。最近はお城の研究も進んでいますので、一般雑誌を読んでいただいたら何か書いてあるかも知れません。ただし、今おっしゃった伊豆石については、私も少しこのあたりの研究はしていますが、幡豆あたりへも伊豆石が持ってこられたという史料を見たことはあります。その他に何かご質問等ございませんか。

質問者B 名古屋の夏目と申します。堀江先生の史料を拝見したので一つお伺いしたいのですが、飯田町に入る荷物と出る荷物について、表の中では非常に量のアンバランスがあるということだったのですが、結局海の産物というのは相対的に山の産物より豊かだと思えるのですが（感覚論ですが）、それに対して例えば信州中馬による役務の提供が物の対価としてどのくらいの効果を持っていたのかという、役務の対価によって海の産物を得たという比率の補正みたいなものが、どのくらいの量としてイメージとしてあるのか、感覚論でいいのですが、もしわかったら教えていただきたいのが一点と、最初の多和田先生のお話で明治30年代の遠山郷に入ってきた石油の件ですけれども、この時代だと東海道線が開通しているのです、例えば浜松近辺の天竜川の下降辺りまで輸送してきた石油を、天竜川の水運で西ノ渡まで上がってきて、今度は陸路でというような可能性というのはどのくらい考えられるのかというのが疑問で、この二点をお伺いさせていただきます。

堀江 そうですね。飯田にとっては非常に得がたい生活に必要な物である塩とかそういう物というのはやはり何にも替えがたいものとして入ってきているかと思います。名古屋からですと50里ぐらいあるのかな。かなりの距離を馬で運んでくることになります。肴の場合ですと、吉田から30里を超えるような距離を経てもやはり生活に必要なものとして入って来るわけです。入ってくるものと出るもののバランスの違いをどういうふうを考えるべきなのか、私も考え直さなくちゃいけないのかなと思うんですけども。そのあたり十分なお答えができなくて申し訳ないです。そんなようなことで許して下さい。

多和田 御質問については今後の課題です。ただし考察の方向性を示すのであれば、運賃をなるべくかけずに運送しようとしたのではないかと、どこを通せば一番安くてすむのかを考えたのだろうと思うんですよね。ほかにも品質の保持、迅速さ、その他さまざまな要素があるでしょうが、運賃はやはり重要な条件だろうと思いますので、鉄道と船を組み合わせた運送が一番安いのであればそれを選択するのではないかなどといった調べ方をしてみたいと考えています。なお前半の中馬の話でいうと、元々きちんとした街道があり、宿駅があり、そこをリレー形式でつないでいくと運賃がかさむので、付け通しを行えば安くすむので中馬が登場してくるというのが古くからいわれていることで、ただしやはり陸運よりも水運を使ったほうがうんと安く、何倍ものひらきがあるだろうと思います。それができないから次善の策として陸路を用い、宿継にするか付け通しを認めるかで争いが生じるというわけで、中馬にしても水運よりは運賃はかかると。それでもしょうがないからそれをやるということだと思います。

司会・神谷 よろしいでしょうか。その他にご質問があれば。

質問者C 豊田の西海と申します。今日いろいろと史料を使っていただいてありがたいのですけ

ども、少し嫌味に聞こえたら申し訳ないのですが、古橋の史料が使われるのはいいのですが、少し一部を見て古橋家のことを書かれると、管理している私としては非常に違和感を今日は持ちました。3年前からこちらの愛知県に住むようになってから、いろいろ方が、県史の方、市史の方、研究者にすると数百名の人が入ってくるのですけれども、全体的に見ないので。今日気になったのは、小さなことから言うと、例えば飯田の件なのですけれども、肴と塩をセットですぐお話をしていますけれども、肴と塩は中を捌いて持ってくるか持ってこないかによって全然違うのですね。これは住んでいたから分かるはずなのです。あそこでは、捌いたのとは入ってくる場所が違いますので、ルートが違います。そういった問題、あるいは大塚先生のですと、虚無僧も実はたくさん史料を私どもは預かっていて数十点ありますし、もっといかがわしい虚無僧の史料もあります。これは目録を作っていないという私の不手際もありますが、実は違うのですけれども、そういうことで公表しないといけないという点もあります。秋葉については、これも私どものところは、享保2年に秋葉に参詣に行くために作った家がありますので、常夜灯も明和5年の段階で建てられたものが全部セットで史料が残っております。それはチマチマした小さな問題です。例えば秋葉の問題は鳳来寺の問題を抜きにしては考えられないだろうと私は思っております。私も管理している史料の中では、やはりセットでと思うのです。例えば秋葉の場合には基本的には代参があるあるといいますが、代参は基本的には少ないのです。堺迎えがないのです、秋葉には。他のものはほとんど堺迎え行事をしているのです。こういう問題、今日出ているのですけど、三河・遠江・南信濃、私は前から思うのですけれど、個人的には46年前からチマチマ歩いてきましたけれども、南信という言葉は使っていませんでした。これは研究者の作ってきた造語でしょうし、それを一般化するというのは、これから我々が問われていくことであるでしょうし、気になるのは美濃が抜けていることです。誰も言わないのですよ。私どもは史料を見て、ほとんど美濃から来ているもので、その美濃がないのです。何故ないのだろうかというようなこと。それは例えば常夜灯の話では出ていないのですけれども、常夜灯でも単記名で出てくるものと、併用で出てくる場合は少し違います。常夜灯を建てる時に、先ほどちらと出てきたのですが、村方の入用で管理される場合と、個人の入用で管理されて常夜灯建てる場合は違います。これは石屋さんの問題とも絡んでいるので、これはあまり言ってしまうと自分にかかってくるので、これからもう少し整理をして、ほとんど私どもに来て手にしなかった史料を、これから目録化しますので、そうしましたら私も責任上何とかしますけれども、3人の先生方のお力を借りて少し三信遠、および美濃を入れたかたちで、これは今日出てきませんでしたが、芸能な問題と木地師の問題は、どうしても抜きにしては考えられません。そのようなところでコメントにもなりませんけれども。

多和田 千村代官所のこともありますし、美濃が重要なのは当然だと思います。肴の種類を細かく見なければならぬというのも当然ですし自覚しています。今後具体的に進めていきたいと考えています。

大塚 申し訳ないですが、本日のお題が三遠南信ですので、どうしても美濃は出しにくかったのですけれども、僕の頭の中では、当然、中津川だとか、そういった地域を入れた上で構成してるつもりです。

堀江 秋葉の問題、鳳来寺の問題がでましたが、この地域ですとやはり鳳来寺、それからもう一つ豊川稲荷ですね。秋葉山とともにこの三つがこの地域に集中しているということが非常に特色あることかと思えます。遠江と三河の境目にあるわけで、この三つを一緒に回るといって、参詣の

旅も近世には行われたようです。幕末期のええじゃないかの御札降りを見てきますと、三河では圧倒的に秋葉の御札が多く、三河地域の人々の意識を解明するには秋葉信仰を対象にすべきであろうと思います。御札降りには、牛頭天王とかお伊勢さんの御札もありますけども、それを上回る数の秋葉山の御札が幕末期に降っております。その点において秋葉信仰というものを一番考えるべきじゃないかなというふうに考えております。

司会・神谷 ありがとうございます。西海先生よろしいでしょうか。真ん中で手を挙げられた方を最後の質問にしたいと思います。

質問者D 津具で生まれ、豊橋で育った村松と申します。19の村の花祭りのお面を彫っております。その関係でいうと、江戸時代の後半、文書に残っているという今日のお題がそういうものなのでどうしようもないわけですけども、私の感想で言うと、津具村の出身ですが、木地師のことと花祭りのこと、要するに花祭りがどこまで伸びていくかということ、水窪のあたりが境なのですよね。下から登ってきた役行者とかそういう人たちがそのあたりまで登っていったけれど、やはりその青崩を越えられなかったというふうに思っております。そのことが、より前の中世ですけども、それが大きな文化圏であったなと思っているのですけど。お聞きしたいのは飯田にみえた時に、私も飯田の博物館とかよく行かせていただき貴重な史料がありまして、例えば飯田の町の人が和田だとか南信濃の村のほうに渡って行く時に水杯を酌み交わして、向こうの方の先生になるということ、皆村挙げて泣いて別れたという話があるのですけど。例えば鹿塩温泉とって塩ができるのですよね。塩があってその上には大鹿だとか、それから高遠があって高遠の湖があって向こうの文化が切れているのですけど、あそここのところの繋がりということが背景にあり、その辺の文書がないのですけども、その辺の話をしていただくと嬉しいなと思います。よろしくお願いします。

多和田 水杯の話についてはなるほどと思うところがあります。というのも、峠を越えてあちら側に行くわけですが、なかなか簡単には越えられないような難所を、昔の人はそれでも通って行ったわけですね。今行っている史料調査をもとに若干補足説明をさせていただくと、今見ている遠山の商家の史料の中にハガキが大量にあって、それも明治30年代のハガキで1日に何便も、3便だか4便だか、飯田の町の商家から遠山の商家にちょっとした用事でも、今であればインターネットで簡単に伝えられるようなことを書きつけてハガキをたくさん出すんですね。峠を越えてハガキが届けられるわけです。明治30年代に郵便制度がかなり整ってきたらしく、夜を徹して向こうに行くのか昼行くのかをちゃんと調べなきゃいけないですが、1日に何便もハガキを出すというのがいのがちょうどそれぐらいからできてきて、当初からかなり使われたということです。相当な労力をかけて峠を越えているわけで、郵便配達は大変だっただろうなということと、郵便制度が近代に入って整えられたことの重みというか、今のインターネットに匹敵する革命的な変化だったのではないかということ、それ以前はどうだったのかということが気になります。私が見ている飯田と遠山の商家は親戚同士でもありますから、親戚づきあいの手紙のやりとりをたくさんしていますが、実際の行き来もして、旅程の途中からハガキを出しているんですよね。10歳あまりの女の子がお父さんか誰かに連れられて途中まで来て、ここまで来ました、私は元気にしていますからお母さん安心してください、道がぬかるんで大変ですなどといったハガキを出している。何が言いたいかというと、史料の発掘を進めていくと、今の水杯の話みたいなことも含めた世界があって、明治に入ってそれがどんどん変わっていく。変わっていくと同時に隔絶した地域だという古い感覚が残っている。その両面の追究がまだ可能だと思っています。我々はそうい

うことをやっていかないと史料も廃棄されかねませんし、史料の重みというのはやはりありますから、これからも発掘していきたいなと感じ入った次第です。

司会・神谷 どうもありがとうございました。それでは時間がまいりましたので、最後にパネリストの方から一言ずつ締め言葉の言葉をよろしくお願いします。もう一度多和田さんから。

多和田 こういう集まりは案外ないですね。西海先生の御発言に通じますが、一つ一つの固有で具体的なモノに即した考察が極めて重要だということを感じました。「塩の道」をとっても、誰が何日かけてどのように山道を越えたのかという点だけでも、全体像の把握は全然できていないと思います。今日はよい機会を与えていただきありがとうございました。

大塚 同じような感想をもちました。研究会、学会では地方史研究協議会という大きなところが、毎年日本列島の色んなところを開催地に選んで、その地域の特質とかを論じるということがよくあるわけですが、愛知県とか静岡県とかは東西の流通、交通の媒介をするような中間的になっていくのですかね、江戸と大阪という（間に名古屋という都市はあるのですが）、そういったところの間で経済、流通、文化というものを媒介するような地域だということ、そういうことをテーゼとして出していたような気がします。これはあまりにも一般的な話にすぎて、尤もだというふうには思いましたけれども、実際、今日やったような、こういうシンポジウムのような形で、もっと個別の具体的な繋がりといいますか、そういうものをほんとに新たに発見するだとか、論点を詰め直すだとかという作業を、ずっとこれからもやる必要があるのだろうなという、そういう感じを強く持ちました。私自身は個別研究として今日は出せなかったのですが、中泉代官所論というような論点はある程度出せたというふうには思っています。本当に今日はありがとうございました。

堀江 今まで舟運についてはわりと私も意識的にやってきましたが、今回こういう機会が与えられてあらためて申馬について信濃と三河の関係を追っていくと、やはり物の移動距離というのは圧倒的に陸路の方が距離が長いわけです。そこをやはりもう少し力を入れて見てみたいところの三河における物の動きは掴めないんじゃないかなというのが実感です。物が動くなかでどういうふうに関係が生まれてくるのか。遠江の人、信濃の人、三河の人が一緒になって共同経営をするとか、そうした人の繋がりをもっと見えるようなかたちで明らかにしていきたいなと思いました。どうもありがとうございました。

司会・神谷 どうもありがとうございました。時間も短くてタイトな日程で申し訳ありませんでした。最後に私も若干この地域を研究しているのでコメントさせていただきますと、とりあえず三遠南信という地域、とりあえずシンポジウムをやってみましたけども、今日はいろいろご報告があったように、例えば同じ三河でもおそらく西三河に行けば尾張とか美濃が見えてくる。当然美濃が近い。田原のほうへ行けば伊勢が近く見える。それは遠江でも西と東で、西は三河や南信が見え、東だと駿河が見える。ですから、同じ地域でもいろいろな考え方があつた。そうするとどんどんやはり広がっていく。そういういろいろな感じの地域が重なって、我々日常的に生活しているということをやったり考えていきたいなと。まだまだこれから研究の途上ですので、また今後ともよろしく願い致します。それでは最後に来年度の担当になるかと思ひます。三遠南信センター長の戸田先生のほうから閉会のお言葉をお願いします。

戸田 皆さん本日は交流の歴史からみる三河・遠州・南信濃シンポジウムにお越しいただきました誠にありがとうございました。また、三先生方、多和田先生、大塚先生、堀江先生、誠にありがとうございました。企画から運営をいただきました神谷先生に厚く御礼申し上げます。

す。実はこれは表題、横のほうに少し書かれておりますが、愛知大学地域研究機構シンポジウムというようになっております。これは何か。冒頭に神谷先生が短くおっしゃいましたが、四つの研究所の共同になっております。一つは中部地方産業研究所、これは産業、経済を研究するっていうことになります。神谷先生の総合郷土研究所は、歴史、時間軸上の研究ということになります。地域政策学センターというのは愛知大学の、この豊橋校舎には地域政策学部という学部がございますが、その学部の研究所。これは学生と共同したり大学の教員と地域が共同して研究する、そういった研究所。それから、私のほうのところは三遠南信地域連携研究センターと、少し長いですが、これは戦後から現代これからの地域政策制度をどうするかという、各々持分の違うフィールドで研究しております。三遠南信というのは、豊橋校舎が立地してるところにつきましても、一つの親密なフィールドということでもあります。一つ一つは行政が県で区切られるということで、明治以降考えてみましたら、いろいろな制度等々はそこで変わってまいりますし、場合によっては新聞も変わる。あるいはテレビ電波も変わるということで、いろいろな生活、経済に影響を及ぼしています。しかしながら、そこは一つの圏域として捉えることができるということで、私ども現代を比較的对象にしておりますが、今日の各先生のご講演、シンポジウムは非常に刺激を受けました。私どもの研究者も何人か来ておりますが、通常、歴史の分野でない研究者も来ております。そういう意味でそういう研究所間のシンポジウムもさらに発展するとさらに面白いのかなという感じも致しました。一つ一つの場所を見ていく、あるいはデータを見ていくということは大変興味深いことだという認識を今日はさらに深くさせていただきました。最後に三先生方また、神谷先生にお礼を申し上げて、またご参加いただいた皆様方にお礼申し上げて、最後の閉会の言葉とさせていただきます。どうもありがとうございました。

司会・神谷 どうもありがとうございました。これにて散会とさせていただきます。どうもありがとうございました。

